

浄土教と社会福祉

藤 吉 慈 海

(花園大学教授
佛教大学講師)

浄土教の立場で社会福祉ということが考えられようか。近代社会福祉や仏教社会福祉学がどこまで進歩しているか、筆者には一向不案内であるが、社会福祉とは文字通り社会のいろいろの歪を正し、人びとの福祉の向上をはかることであるに相違ない。これに対し、浄土教とは

離穢土・欣求浄土といわれるように、穢土という現実の世界を厭い離れて、浄土という理想的世界に生まれんと欣い求める教であるように思われる。しかし、よく考えてみると、現実の世界が穢土であるという見方も、果してそれでよいのであろうか。よしんば穢土であるとしても、それを厭離するということは、どういうことであらうか。おそらく、それは一般的に言って現実の否定を意味するであら

う。現実の否定から、社会の福祉をはかるということは、どのようにして可能であらうか。現実の世界を穢土として厭離することが、浄土教の基本的思潮であるとするならば、そこからは現実社会の福祉の向上をはかるということはお出で来ないのではなからうか。

社会福祉ということは、現実社会の福祉の向上をはかることであるから、そこには現実の世界を厭離することとはありえないし、現実の世界を厭離することからは積極的に現実の世界をよくするという社会福祉は考えられない。したがって、浄土教そのものと社会福祉とは、原理的に矛盾する考えではなからうか。

それにもかかわらず、浄土教者が社会福祉に貢献してい

る事實は見逃せない。そこにはどのような思想的調整がなされているのであろうか。浄土教の先覚者の中には、浄土教を近代的に受容し、社会福祉事業に尽瘁することをすめたようである。筆者が浄土宗社会派と呼ぶ、渡辺海旭・矢吹慶輝・椎尾弁匡・長谷川良信等の諸師は、浄土教とは社会を浄化する教であるとして、来世に極楽浄土に往生するというより、現世において社会を浄化することに尽力すべきであると主張した。このような浄土教の新しい受けとり方は、浄土教のオーソドックスと考えられて来た人びとには、それは浄仏国土、成就衆生を主張する聖道門の考えであって、厭離穢土、欣求浄土を基調とする浄土門の教えではないと反撥する向もあつたが、いつの間にか妥協的に受けとられたようである。

元来、阿弥陀仏の慈悲を説く浄土教者が、社会の谷間にあえぐ人びとを無視してよい筈はない。この人びとを精神的にも物質的にも救って行くのが、真の仏教者の生き方であり、浄土教者もまたその道を行くものと思われる。しかし親鸞聖人が述べられたように、「小慈小悲もなき身にて、有情利益は思うまじ」で、たしかに、われわれの慈悲心な

どというものはいわゆる「末通らざる慈悲」であり不徹底なものである。いわゆるそれは「雑毒の善、虚仮の行」となりやすい。そのような深い内省を必要とすることは言うまでもないが、それでも仏教者としては、また浄土教者としては、灰頭土面の勇を鼓して、泥の中にとびこむべきではあるまいか。今日では浄土教者の中にも法蔵菩薩のそれのように、「我行精進忍終不悔」と菩薩としての願行を實踐して行くところに、新しい浄土教があるかの如く解せられる向きもある。そうなると、従来いわれたような聖道・浄土の区別はあまりはつきりしなくなつて来る。一つのもの裏表と解するような傾向もあらわれて来て、浄土教者が来世の浄土往生を期待することは、現世における自己と社会の浄化をなした上でのことであると考えられるようになった。

従来の浄土教が、菩薩道としての六度の行を、現世においては到底実践不可能であるとして、彼土に生まれた後になされる行であると解して来たのに対し、今日では、六度の行も、念仏とともに、せいぜい現世で実践せらるべき行であると説かれるようになっていようである。これまで

は、浄土教者は専修念仏に徹底すべきであって、社会福祉事業等をやることは雑行雑修であり、浄土教の教えにもとるとすら解せられた。そこにも、いつのまにか浄土教の新しい組織がえがなされていると言えるであらう。

たまたま椎尾弁匠上人の晩年の講述である『正伝法第二輯』を読んでいたら、

「今日もここにおいでいただいております阿川(貫達)先生が幼稚園をやり、これを寺務の一つとして専門にやろうとした時に、それが浄土教に、弥陀の本願に、かなうものであるということ、即ち宗乗の本願に乗ずる、あるいはここで言う、二尊の教えに乗じて浄土門を開くという、いわゆる宗乗が実生活となつて、今、今と受取れるよろこびを感じたとおっしゃったことも、この信行禅師の立場で見た、諸仏諸経と違った、浄土教の気持、ことに善導のいま云われます、我れ、今、二尊の教えに乗じて開くという、その浄土門の中へ入つて来た気持ちが、一層強くなされたことであり、あるいは横内君が社会事業が宗乗というものになつたんだ、宗学の理窟や知識でなくて、社会救済の

實際が宗学になつたのだと感じて、この社会事業に努力され、だんだんその道を開いて行かれました」(一五〇・一五一頁)

という一節を興味深く読んだ。大正大学浄土学の主任教授であられた阿川先生が幼稚園をやり、これが浄土宗の教えに合致するというお気持になられたことを知ったからである。先生の『浄土宗義概説』を読むと、専ら往生浄土の道が説かれていて、幼稚園をやるといふような社会福祉的活動の出でくる根拠は殆ど見られないように思っていたが、先生御自身、幼稚園をはじめられて、それが浄土教に、弥陀の本願に、かなうものであることを実感されたということに興味と驚きすら感じた。

椎尾法主は、「真諦門に立てこもつて、他を俗諦門として捨てておるところに、不十分さが現われて来たので、そこで東西本願寺なども、数年前から、態度を変えて、両派の法主が先に立ち、あるいは智子夫人が先に立つて、大衆の中に、実生活の中に、本願教を開いて行こうとつとめるようになられた」(一五五頁)とも述べていられる。さらに、

「この五十年間の、日本での変りを考えます時に、善導大師が一三〇〇年前に、このことを高く掲げましたことは、余程偉大なことである。善導大師が、聖道諸宗とならんで浄土宗を開いたということで、自分の仕事、自分の主張を標榜したぐらいのことで、この文がのべられたものではない。況んや我々が仏教に入つて、今日はこの住職になる晋山をやるというような小さいことで、この『十方恒沙仏 六通照知我 今乗二尊教 広開浄土門』と書き上げられたものではない。善導の熱意と徹見と、そして広く社会に対する大誓願とに燃え上つた時に書かれたものである」(一五一・

二頁)

と、さすがに浄土宗の先覚らしい発言をしていられる。そのような立場から一寺院一事業ということを叫ばれ、浄土宗寺院が他宗に先んじて社会の福祉向上のために、幼稚園・保育園・老人ホーム等をつくり、活潑な活動をするようになったことは注目すべきことである。

観経の中にも「仏身を見奉るものはまた仏の心を見奉る、仏の心とは大慈悲これなり、無縁の慈を以て、諸の衆

生を撰したもう」とあるが、浄土教者は、信心念仏者であると共に、「念々見諸仏」の人であり、仏の大悲心をわがものとして、無縁平等の慈を以て、諸の衆生を撰取することが仏教社会福祉の基本原理となるであろう。しかしこれは向下的な諸仏の立場に立つ人のことであつて、向上的な求道者の立場に立つ人には、なかなか身につかない考え方である。浄土教者としては社会福祉の実践の場を自らの求道修行の道場として、進んで行くより外に、おちつける道はないのではなからうか。

(五二・九・二〇)

